



サイエンスの余白

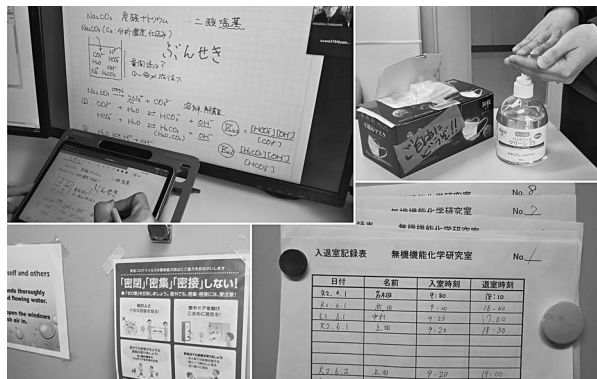
京都大学の白井 理先生よりバトンを受け取りました。山口大学の中山雅晴と申します。白井先生は、私たちが主に発表させて頂いている電気化学分析セッションを牽引している研究者であると同時に、私が実行委員長を務めた2017年の分析化学討論会で大変お世話になった方です。白井先生は前年に龍谷大学で開催された討論会(実行委員長:藤原 学先生)の庶務幹事でした。引継ぎ会での白井先生たちの安堵の笑顔が印象的で、その後1年に及ぶ準備の大変さを覚悟したことを今でも覚えてます。

さて、この原稿に取り組み始めた今、新型コロナウイルス感染の第3波を迎えています。ほとんどの方がそうであるように、私の2020年度の出張は激減しました。出張には、だいたい文庫本(小説)を2,3冊もって行くので、読んだ小説もかなり減ったことになりま。普段からそんなに小説を読む方ではなく、出張中の読書は移動やホテルにいる間の時間潰しです。その程度なので、面白い本に対する嗅覚はもっていません。しかし、面白くなくては時間潰しにならないので、ヘビーな読書家である妻に選んでもらうのが慣例です。私をよく知っているだけに、ほとんどハズレはありません。ただ、その本が「仕事一筋で傲慢だった夫が、退職後、じわじわと妻に仕返しされる話」だったときは、出張後の私の行動や言動が少し変化します。

ところで、普段、論文を主に読んでいるであろう皆さんは、小説を読み終えたときや読んでいる途中で「説明不足」を感じることは無いでしょうか? また、映画でも主人公が立ち去るシーンで終わると、エンドロールの後に「〇〇年後…」と出てきそうな気がして中々席を立てないということは無いでしょうか? 映画の主人公がその後どうなったのか、小説の解釈が正解なのか間違っているのか、私はとても気になります。あるいは別の解釈があるのではないかと。妻に正解を尋ねると、「正解とか間違いないって無い。読者によって物語が何通りにも変化し、書き手もそれを見越して書いている。だから、読み手の力も試される。」とのこと。文学では、「行間は経験で読む」らしいのです。

では、論文の方はどうでしょうか? 今年は研究室の雑誌会(自分の研究テーマに関係のある論文の読み合わせ)をZoomで行っています。学生が誤った解釈をしたら、指導的な立場である私が正さないといけません。それが文学とサイエンスの違いだ…と言いたところですが、思い出してみると、私が学生の頃(30年以上前)はもちろん、何年か前までは、想像力をかき立てる論文、幾通りにも読める論文、結局最後まで分からない論文がもっとあったように思います。そもそも辞書に載っていない専門用語をGoogleで調べることは不可能でした。ところが、最近の学生はハイグレードな雑誌から自分の研究に関係ありそうな論文を的確に見つけ出し、翻訳機能とGoogleを駆使して、卒なく雑誌会をこなしてゆきます。Windows 95の発売がきっかけで、インターネットが一気に普及したと言いますから、彼らは物心ついたときからインターネットに触れており、あらゆる間違った可能性を「検索」によって回避できる環境で育ってきたはず。読み手だけでなく、書き手もまた、インターネット&検索生活を20年以上続けていることになりま。

ここからは、私のレベル、ならびに私の切り取った世界の中で、という前置きが必要ですが、最近の論文(=研究)は何もかもを詰めこもうとするあまり、行間や余白が無くなっているように思います。そのため、想像の



コロナ禍で研究室の日常も変わりました: 手書きによる「分析化学」のオンライン講義(左上)、研究室の入室制限(右下)など

余白がどんどん減っているような気がするのです。それは分析機器の発達を始めとする科学の進歩に他ならないのですが、すべてが同じ方向に向かうことに違和感を覚えます。同じ分野であれば、定型のイントロダクションから始まり、同じ順番で実験データが並びます。データはサポーティングインフォメーションによって、さらに強固なものになり、間違いのない結論が導かれます。しかし、その結論はすでに分かっているものであり、源流を辿ると50年前ぐらいの論文に行き着く、といった具合です。言い換えると、50年前の余白が今の研究を後押ししていることになりま。

最近、私が投稿した論文に対する審査で、「〇〇のデータが足りないで、追加するように」というコメントが返ってきました。「余白を埋めて間違いのないものに」という意味です。もちろん、そのデータが論旨を理解するのに不可欠なものならば、このコメントを受け入れますが、「他のデータで同じことを察知できるし、出したデータ以上のことは言っていないのだから、その必要はない」と返答しました。幸いにして受理されましたが、最近はこのように「不足」を指摘されることも結構多いのではないかと思います。開き直って言うと、査読者の方も読む力が落ちてきているのかもしれない。私が何年も前に書いた論文の被引用数が、忘れた頃に急増することがあります。その論文は、必ずしもハイグレードな雑誌に掲載された訳ではなく、むしろ穴(=余白)だらけだったりします。その当時は余白だとは思っていないのですが。

今、このエッセイと同時に論文の原稿も書いています。研究者である限り、良い論文を書きたいと思うのは当たり前のことです。私の周りの若い先生たちは常に一流雑誌に投稿することを念頭に研究しており、それを体現しています。しかし、それがすべてではなく、私の知力と置かれた環境の中でタイミング良く論文を出し続けることに私自身の使命を感じています。その余白が何年後かの研究を後押しすることを願いながら。

今回は、佐賀大学の富永昌人先生にバトンをお渡しします。富永先生とは新型コロナウイルスの感染が本格化する直前に別の学会の支部幹事会でお会いしたのが最後になります。そのため、メールでの唐突なお願いになってしまったのですが、快くお引き受け頂きました。本当にありがとうございます。では、よろしく願いいたします。

〔山口大学大学院創成科学研究科 中山雅晴〕